JSPS STOCKHOLM

ニュースレター 62号

2019.5.24

特集

JSPSノルウェー同窓会の設立

ページ

プロローグ	1
特集	3
ニュース	5
セミナー参加者によるレポート	12
訪問・来会記録	17
北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介	19
北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介	23
学術動向	25
お知らせ	30

プロローグ

人名・地名表記の難しさ

JSPSストックホルム研究連絡センター長　津本　忠治

「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」、これは明治時代の小説家、斎藤緑雨の川柳で外国（日本以外の国）の人名を日本語表記することの難しさを良く表している。実際、Goetheの“oe”は日本語の発音にはないドイツ語の発音であるため種々の日本語表記が生じたらしい。最初にファウストなどゲーテの作品の日本語訳を試みた森鴎外は「ギョオテ」としたが、その後「ヴィテー」、「ブーテ」、「ギョーテ」、「ギョテ」、「ギユエテ」等々、訳者や引用者によって少しずつ異なる表記がなされ現在まで30以上の表記がみつかっているという。

スウェーデンの人名にも日本語表記の難しいものがある。小生がストックホルムに着任してすぐのスウェーデンの西も東もわからない時であったが、観光ガイドブックで北欧一高いと紹介されていた大聖堂を見るためにストックホルムから電車で30～40分のところにあるウプサラへ出かけた。確かに天をつく高さを誇る大聖堂の巨大さに圧倒されたが、ついでに向いにあるGustavianum（日本語表記ではグスタヴィアヌム）と称する歴史博物館へ行ってみた。ここはウプサラ大学が管理しているそうで見ごたえのある展示物が結構多数あった。その中でCarl Peter Thunbergに関するコレクションを見て「目からうろこ」の驚きとともにそれまでの自分の無知無学を大いに恥じ入った。

Carl Peter Thunbergは日本の江戸時代1775年から1776年まで医師として長崎の出島に滞在したスウェーデン人（江戸幕府には例外的に入国を許されていたオランダ人と称していたらしい）で、日本の植物標本を多数集めるとともに鎖国時代の日本を紹介する著書もあり、日本とスウェーデンの関係を考える際には忘れることのできない人物である。簡単な紹介はウィキペディア（https://ja.wikipedia.org/wiki/カール・ツンベルク）にあるが、より正確で詳しい情報は2014年に英文で出版されたMarie-Christine Skunckeの単行本（参考文献1）にある。この本は歴史博物館のミュージアムショップでみつけ早速購入したが、その当時の日本の文物の挿画などを多数含み大変値打ちものだと思った。実際、この本は大変興味深いものであったので、その後出会ったスウェーデンの人にテュンベルグに関する本を読んだとの話をしたところ“テュンベルグ？”と話しがすぐに通じなかった。どうも発音が違うらしく聞き直してみるとスウェーデン語では“berg”をベリーと発音するということで“ツュンベリー”と言うべきであることを教わった。上記のウィキペディアでは“ツンベルク”と表記されているが、その説明文にはスウェーデン語に近い発音表記はトウーンベリでそれ以外にも10以上の日本語表記があると記載されている。また、日本とスウェーデン外交関係樹立150周年を記念して出版された参考文献2の中の記事にはツウンベリと表記されている。

このThunbergという姓はスウェーデンでは珍しいものではないらしい。最近、地球温暖化対策を要求し学校の授業を休み街頭に繰り出す若者のデモの発案、創始者として有名になったスウェーデンの高校生はGreta Thunbergという名前であるが、日本の新聞ではグレタ・トウンベリさんとスウェーデン語に近いカタカナで紹介されている。日本でも当地での発音を調べたらしくほぼ正しい表記となっている。

地名表記の厄介さ

都市名などの地名表記には人名表記と同じように現地の発音を正確に表記できるかという問題があるが、さらに厄介なのは英語では一見あるいは一聞（？）全く異なる表現をする場合があるという問題である。スウェーデン第2の都市であるGöteborgは日本語での正確な発音が難しくヨーテボリ、イエーテボリ、イエテボリ、エーテボリ等と表記されることがある。小生はヨーテボリと表記し、スウェーデンの人達との会話でもそのように発音すると大体通じるようである。ただ、これは、正確な発音でなくても日本人であるからなまっているのは当然と大目にみてくれているからであろう。問題は英語で話している時に「ゴーテンバーク」と英語名で呼ばれた場合で一瞬どこの都市かと当惑してしまうことがある。「ゴーテンバーク」と「ヨーテボリ」と小生の感覚では似ても似つかない発音なので意識しておかないと会話がとんちんかんになる場合がある。小生の知っている範囲内ではスウェーデン中部の都市Linköpings（リンシエーピン）が次に表記が難しい地名かもしれないが英語の会話ではリンショーピンで通じるようである。ただ、英語で綴る場合はLinköpingと“s”を取るという微妙な違いがみられる。

プロローグ

ヨーロッパには地名の現地表記と英語表記が異なる場合が多く当惑することがよくある。良く知られている例としてウィーンをビエンナ、ミュンヘンをミューニヒと呼ぶが、これは発音が近く連想も働き戸惑うこともないが、小生の経験では英語でテューリンと言われて一瞬どこかと戸惑ったことがあった。これは北イタリアのトリノの英語名称とのことであるが、初めて聞いた人にはわかりにくい話である。その他、イタリアにはフィレンツエをフローレンス、ベネツィアをベニスと現地表記とかなり異なる英語表記が多いが、北欧には、上記のヨーテボリ以外大きく現地表記と英語表記が異なる地名はないように思われる。ただ、これは小生の認識不足かも知れない。

いずれにしろ、地名・人名の日本語表記は現地の住人や御当人の発音を尊重してそれにできるだけ近いカタカナを用いるべきではなかろうか。

参考文献

1. Marie-Christine Skuncke “Carl Peter Thunberg – Botanist and Physician” Swedish Collegium for Advanced, 2014.
2. Bert Edstrom バート・エドストロム著 Sverige-Japan スウェーデン－日本 150 ÅR AV VANSKAP OCH SAMARBETE 150年の友情と協力 Sweden-Japan Foundation, 2018

新任者の紹介

左から順に吉中国際協力員、和泉国際協力員

和泉 一義（いずみ かずよし） 国際協力員

4月からストックホルム研究連絡センターに着任しました和泉と申します。スウェーデンで生活するのは初めてですが、数週間過ごしただけで、人・文化・環境に魅了され、1年間この国に滞在することをとても楽しみにしています。スウェーデンで過ごす時間を大切にし、北欧諸国・バルト三国と日本との学術交流に貢献できるよう精進します。どうぞよろしくお願いいたします。

吉中 真優（よしなか まゆ） 国際協力員

4月からストックホルム研究連絡センターに着任しました吉中と申します。スウェーデンの美しい街並みや人々の優しさ、国際性にとても魅力を感じています。滞在期間中に少しでも多くの研究機関の国際化に関する戦略や計画を学びたいと思っています。皆様と一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

特 集

JSPSノルウェー同窓会の設立

2019年4月12日、JSPS本部で開催された役員会で、JSPSノルウェー同窓会（以下、ACN）が19番目の同窓会組織として承認された。ACNは2017年から会長であるAnders Øverby（アンネシュ・オーベルビー）氏を中心に設立への準備を開始した。2018年に入り、自主的に会員が集まり、組織としての活動が始まった。同年7月には設立準備会合を開催し、その後、2019年2月には自主イベントとしてNorway-Japan Alumni and Researcher Gatheringを開催した。このような献身的かつ積極的な活動が評価され、正式なJSPS公認の同窓会組織として認定された。

現在ACNは会員数約60名で、2019年10月に予定している学術セミナーの開催に向けて準備を進めている。

今回、同窓会設立を受けて、会長のØverby氏にメッセージをいただいた。

JSPSノルウェー同窓会の設立に当たって

JSPSノルウェー同窓会
会長　Anders Øverby

2019年4月12日、ACNは、19番目の同窓会として、JSPS本部から正式に認定された。これを受け、同窓会会長として一言御挨拶申し上げたい。

これまでの足跡を振り返ると、まず、2017年1月にノルウェー・オスロで開催されたJSPSミーティングに遡る。この会で、ストックホルム研究連絡センターの津本センター長は、すでに活動を行っているスウェーデン、フィンランド、デンマークの3つの同窓会の取組を紹介した。私はその活動に強く共感し、ノルウェーでも日本とノルウェーの研究者コミュニティを形成するために行動を起こすべきだと感じた。早速、設立への手続きを進めるためにストックホルム研究連絡センターに相談したところ、様々な形で多大な支援を提供してくれた。手続きを進める上で、最初に取り組まなければならなかったことは、会員の確保である。一定数の会員を確保した後に、同窓会幹部会委員候補者を選出する必要があった。選出するに当たり、依頼をしたすべての会員が快く引き受けてくれたので、申請手続きは順調に進んだ。

2018年春に同窓会設立の申請をJSPS本部に行ったが、ボランティアでの一定期間の活動を経て、その活動実績によって認定するかどうか評価するとのことで、とても残念な思いをしたが、諦めずに活動を続けた。2018年には、キックオフイベント、幹部会委員が集まった初めての設立準備会合、その後、2019年2月には、第1回Norway-Japan Alumni and Researcher Gatheringを開催した。そしてついに、JSPS本部が私たちの申請を受け入れ、正式にACNの設立が承認された。承認されるまでの間、同窓会の幹部会委員だけでなく、すべての会員から熱意や積極性、そして組織に貢献しようという思いを強く感じた。これこそが、私が求めていた同窓会のアイデンティティーである。

私はこの同窓会がノルウェーと日本の垣根を越えて、同じ興味を持つ研究者が出合い、新しい繋がりを築き、将来の協働について話し合い、友人や同僚も交えた有意義な時間を過ごす場になることを望んでいる。正式にACNが設立された今、以前に増して会員が同窓会の活動に関与することが容易になり、研究者ネットワークの形成による効果をより感じることができるようになった。

ACNはストックホルム研究連絡センターに加え、ノルウェー研究評議会（以下、RCN）やノルウェー国際協力・高等教育推進庁（以下、Diku）とも協働を進めていく。私たちはすでに2019年10月の共催セミナーについて意見交換を進めており、今後毎年一度はこのようなセミナーを開催したいと考えている。さらに、同窓会の幹部会委員や正会員から企画案を募集し、彼らが主催者となり、イベントのテーマやプログラムを提案するいわゆる同窓会セミナーも毎年開催したいと考えている。

最後に、私たちは毎年開催されているNorway-Japan Academic Networkにおける重要な役割を、今後も担い続けることを望んでいる。そして、これまでACNの設立と活動に貢献した全ての人に心からの感謝を述べたい。この同窓会が関係する全ての人の期待に沿うものであり、ノルウェーと日本の懸け橋となる生産的で友好的なコミュニティになることを心から望んでいる。

特 集

JSPSノルウェー同窓会幹部会委員紹介

会長
Dr. Anders Øverby
Centre of Education in Kongsvinger
プロジェクトリーダー

副会長
Prof. Rasmus Gjedssø Bertelsen
トロムソ大学教授

幹部会委員
Prof. Bruno Laeng
オスロ大学教授

幹部会委員
Dr. CJ Beegle-Krause
SINTEF Ocean シニア研究員

幹部会委員
北山 夕華
大阪大学国際教育交流センター
准教授

今後の主な予定

・2019年5月1日（水）～6月30日（日）：同窓会セミナーの公募

・2019年10月17日（木）：・同窓会設立記念式典の開催
・JSPS、RCN、Dikuとの共催セミナーの開催

・2020年1月又は2月：Norway-Japan Academic Networkの開催

同窓会の活動や同窓会作成のニュースレターについては、こちらを御覧ください。
https://www.jsps-sto.com/alumni-club-3/alumni-club-in-norway/

2018年7月の設立準備会合の様子

第1回Norway-Japan Alumni and Researcher Gatheringの様子

ニュース

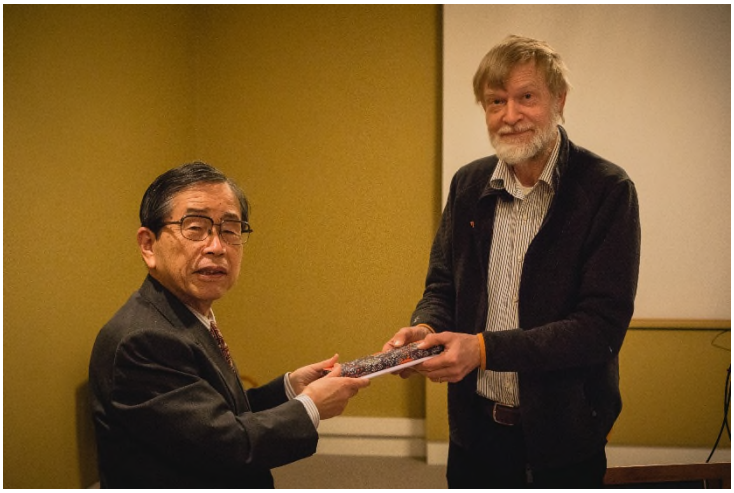
2018年度JSPSスウェーデン同窓会合同幹部会総会の開催

2019年2月1日、スウェーデン王立科学アカデミー（以下、KVA）において、JSPSスウェーデン同窓会合同幹部会総会が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、石井現地職員が参加した。

総会では、2018年度の活動報告や2019年度の同窓会活動計画についての審議のほか、2019年度からの新幹部会委員の選出が行われた。

2016年1月から約3年間会長を務めたGöran Thor氏（スウェーデン農業科学大学教授）、委員のThomas Lennerfors氏（ウプサラ大学上級講師）、Lars Öhrström氏（チャルマース工科大学教授）の2019年3月での退任が承認された。これに伴い、2019年4月から、会長にはElin Palm氏（リンショーピン大学助教授）、副会長にはImre Pázsit（チャルマース工科大学教授）が就任する。併せて、Helena Filipsson氏（ルンド大学教授）、Johan Eriksson氏（ウプサラ大学准教授）、Püren Güler氏（エレブルー大学ポスドク研究員）の幹部会委員への就任が承認された。

最後に、津本センター長より、同窓会の発展に尽力したThor氏、Lennerfors氏、Öhrström氏に感謝の意が示され記念品が贈呈された。また、Palm新会長を中心に同窓会活動の更なる充実に向けた期待が示された。



津本センター長からThor教授へ
記念品贈呈

Palm新会長

Photo: Erik Thor

Filipsson新幹部会委員

Eriksson新幹部会委員

Güler新幹部会委員

ニュース

第7回Sweden-Japan Academic Networkの開催

2019年2月1日、KVAにおいて、在スウェーデン日本国大使館、KVA、及びストックホルム研究連絡センターの共催により、第7回Sweden-Japan Academic Networkが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、石田国際協力員、石井現地職員が参加した。

初めに、Dan Larhammar KVA会長により開会の挨拶があり、引き続き津本センター長によりJSPSのプログラムと活動内容について紹介があった。その後、Thorスウェーデン農業科学大学教授・JSPSスウェーデン同窓会会長、及び河野美恵子スウェーデン自然史博物館研究員より講演が行われた。本セミナーには63名が参加し、各講演後の質疑応答では活発な意見交換が行われるなど、充実したイベントとなった。

講演に続き行われたレセプションでは、冒頭で、廣木重之在スウェーデン日本国大使から、今後の日瑞の学術交流の更なる促進に向けて取り組んでいきたいとの御挨拶に続いて、乾杯の発声が行われた。参加者は、その後のレセプションで関係者と親睦を深めた。

（河野研究員によるレポートはP.12参照）

講演を行うThor教授

講演を行う河野研究員

第1回Norway-Japan Alumni and Researcher Gatheringの開催

2019年2月6日、RCNにおいて、ACN、RCN、及びストックホルム研究連絡センターの共催により、第1回Norway-Japan Alumni and Researcher Gatheringが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、伊藝国際協力員が参加した。

本セミナーはACNの会員により初めて開催された自立的なイベントとなった。冒頭、Øverby会長の開会挨拶から始まり、吉原副センター長からJSPSのプログラムと活動内容について紹介があった。その後、吉澤剛オスロ都市大学労働研究所リサーチフェロー、多々良尚愛前オスロ都市大学ポスドク研究員、松岡健一ノルウェー極地研究所上級研究員から講演が行われ、最後に参加者がグループに分かれ、今後の共同研究や交流について意見交換が行われた。本セミナーには24名が参加し、参加者間で親睦を深めるとともに、日本とノルウェーの学術交流の促進に資するセミナーとなった。

（多々良前ポスドク研究員によるレポートはP.13参照）

開会挨拶を行うØverby会長

参加者との集合写真

ニュース

第3回Norway-Japan Academic Networkの開催

2019年2月6日、RCNにおいて、RCNとストックホルム研究連絡センターの共催により、第3回Norway-Japan Academic Networkが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、伊藝国際協力員が参加した。

今回のセミナーは、ノルウェー在住の日本人研究者、学術研究のため日本に滞在した経験のあるノルウェー人研究者等を対象に、日本とノルウェーの学術交流や研究者交流の促進を目的に開催され、42名が参加した。

津本センター長の開会挨拶に続き、Julie Christiansen RCN国際部シニアアドバイザー、Arne Haugen Dikuシニアアドバイザー、山森健成在ノルウェー日本国大使館三等書記官から、それぞれの事業説明や国際プログラム等についての説明があった。続いて大西富士夫北海道大学准教授、Ivar Rønnestad ベルゲン大学教授、Alexander Karl Rothkopf スタヴァンゲル大学准教授による研究講演が行われ、最後にØverby 会長から同窓会の活動について説明があった。

セミナー後に行われた懇親会では、和やかな雰囲気の中で親睦を深め、研究者交流のよい機会となった。
（大西准教授によるレポートはP.14参照）

講演を行う大西准教授

講演を行うRønnestad教授

講演を行うKarl Rothkopf准教授

Japan Weekへの参加

2019年3月1日、ストックホルム商科大学において、Japan Weekが開催された。本イベントはストックホルム商科大学及びスウェーデン王立工科大学と一橋大学の学生団体であるExchange Japanが主催し、両国の学生間交流を主目的として年に1回開催されている。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、グランストロム現地職員が参加した。

会場には関係団体・機関の展示やブースが並び多くの催しが企画された。イベントの1つとして、廣木在スウェーデン日本国大使からこれまでの外交官や大使としての実務経験を踏まえて、両国の交流の促進についての講演が行われた。ストックホルム研究連絡センターもブースを設置し、現地の学生に外国人特別研究員制度などの事業の紹介を行うとともに、参加者からの質問に対応した。また、Exchange Japanと今後の協働について意見交換を行い、引き続き連携していくことを共有した。

ストックホルム研究連絡センターブースの様子

ニュース

2018年度JSPSフィンランド同窓会幹部会、All Alumni Meetingの開催

2019年3月1日、ヘルシンキ大学において、JSPSフィンランド同窓会幹部会、All Alumni Meetingが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、石井現地職員が参加した。

幹部会では、Ville Syrjälä会長から、2018年度に行われた同窓会活動や、2019年度予定している活動の概要について報告があった。また、2019年は同窓会設立10周年、日本・フィンランド外交関係樹立100周年にあたる年であることから、記念行事についても意見交換が行われた。2019年度の幹部会委員人事については、Syrjälä会長以下全員の留任が承認された。

幹部会終了後、同会場にて「Enhance academic exchange between Finland and Japan!」と題し、JSPSフィンランド同窓会、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス、ストックホルム研究連絡センターの共催により、All Alumni Meetingが開催され、42名が参加した。また、本イベントは在フィンランド日本国大使館から後援いただき、外交関係樹立100周年記念行事と認定された。

冒頭、吉原副センター長からJSPSのプログラムと活動内容について紹介があった。その後、主催機関である北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの田畑伸一郎所長、岡部赴大副所長、さらに、フィンランド・アカデミーのUlla Ellmén 科学アドバイザーから、所属機関の取組やプログラムについての説明があった。その後、武田靖チューリッヒ連邦工科大学・北海道大学教授、中村美穂トゥルク大学シニア研究員、Elina Oksanen東フィンランド大学教授・JSPSフィンランド同窓会幹部会委員から講演があり、参加者は講演を傾聴した。レセプションでは、参加者が研究者ネットワークの構築や日本とフィンランドの関係強化等について意見交換を行うとともに、親睦を深めた。

（中村シニア研究員によるレポートはP.15参照）

講演を行う武田教授

講演を行うOksanen教授

All Alumni Meetingの様子

ニュース

2018年度JSPSデンマーク同窓会総会の開催

2019年3月15日、デンマーク工科大学において、JSPSデンマーク同窓会総会が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、石田国際協力員が参加した。

総会では、2018年度の活動報告や2019年度の同窓会活動計画についての審議のほか、2019年度からの新幹部会委員の選出が行われ、同幹部会委員のMaher Abou Hachem氏（デンマーク工科大学教授）、Eugen Stamate氏（デンマーク工科大学上級研究員）の2019年3月での退任が承認された。また、2019年4月からの新体制として、会長にはCarl Winsløw氏（コペンハーゲン大学教授）が再任となり、併せて、Leila Lo Leggio氏（コペンハーゲン大学教授）、Mollie Brooks氏（デンマーク工科大学研究員）の幹部会委員への就任が承認された。最後に、吉原副センター長から、同窓会の発展に尽力したAbou Hachem氏、Stamate氏に、感謝の言葉が贈られた。

Lo Leggio新幹部会委員

Brooks新幹部会委員

第4回Japan Alumni and Researcher Assemblyの開催

2019年3月15日、デンマーク工科大学において、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会、JSPSデンマーク同窓会、ストックホルム研究連絡センターの共催により、第4回Japan Alumni and Researcher Assemblyが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、石田国際協力員が参加した。

笹谷能史在デンマーク日本国大使代理による開会挨拶に続いて、吉原副センター長からJSPSのプログラムと活動内容についての紹介が行われ、その後主催機関からそれぞれの事業や取組について説明があった。森春英北海道大学教授、Lo Leggioコペンハーゲン大学教授から基調講演が行われた後、Birte Svenssonデンマーク工科大学教授、Henrik Gudmundsson CONCITOシニアコンサルタントの2名を加え、食料や環境、資源の効率的利用における日本とデンマークの協力をテーマにパネルディスカッションが行われた。会場からも多くの質問や意見が寄せられ、活発な議論が行われた。本セミナーには54名が参加し、両国の学術交流の促進に寄与するイベントとなった。閉会後は、レセプションが開かれ、引き続き参加者間で意見交換が行われた。
（森教授によるレポートはP.16参照）

講演を行う森教授

講演を行うLo Leggio教授

参加者との集合写真

ニュース

ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2019の開催

2019年3月17日、パシフィコ横浜において、JSPS本部とノーベル・メディアAB（ノーベル財団広報部門）の共催により、ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2019が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加した。当シンポジウムは、2012年より毎年スウェーデンにおいてノーベル賞授賞式の時期に開催されている一般向けの公開シンポジウムである「ノーベル・ウィーク・ダイアログ」を日本で開催するものである。

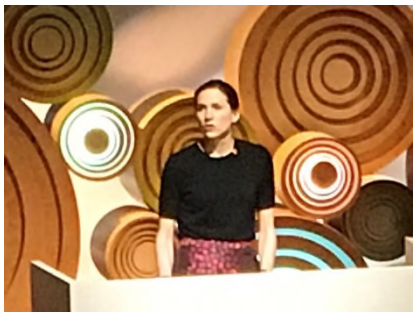
2015年3月、2017年2月、2018年3月に続き、第4回目を迎えた今回は、テーマを“The Age of Come”「科学が拓く明るい長寿社会」と題し、長寿社会における生き方や高齢者のための技術革新、老化防止にかかる最先端の研究等について迫る内容となった。

2018年ノーベル医学・生理学賞受賞者の本庶佑京都大学高等研究院副院長・特別教授を含む5名のノーベル賞受賞者と、学術界や産業界から多数の有識者を迎え、里見進JSPS理事長の開会挨拶に始まり、講演、パネルディスカッション、インタビュー、対話等様々なプログラムが用意され、Laura Sprechmannノーベル・メディアAB副CEOの挨拶で閉会した。日本国内外から約1,000名が参加し、会場全体が熱心に聴き入っていた。

当日の講演・ディスカッションのストリーミング映像は、以下のURLから視聴可能
https://www.youtube.com/nobeldialogue

開会の挨拶を行う里見理事長

パネルディスカッションの様子


閉会の挨拶を行う
Sprechmann副CEO

KVA年次総会への参加

2019年3月31日、ストックホルムMusikaliskaのメインホールにおいて、KVA年次総会が開催された。KVAの招待を受け、ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加した。

Larhammar KVA会長の開会挨拶、Göran K. Hansson KVA事務総長から2018年の活動報告が行われた。引き続き、大きな功績を残した研究者に対してゴラン・グスタフソン賞、グレゴリー・アミノフ賞、ショーベリ賞の各賞の表彰式の後、Susan Solomonマサチューセッツ工科大学教授、Ulf Ellervikルンド大学教授による講演が行われた。年次総会の後、北方民族博物館で盛大な晩餐会が開催された。

開会挨拶を行うLarhammar会長

表彰式の様子

ニュース

在スウェーデン日本人研究者の会の開催

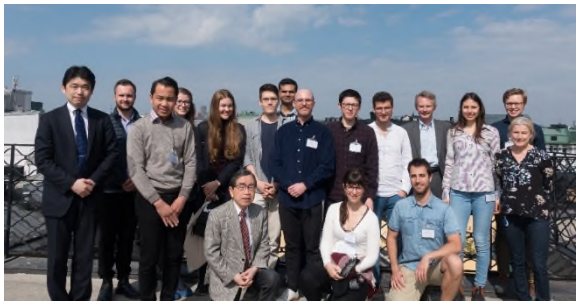
2019年4月25日、ストックホルム市内にて在スウェーデン日本人研究者の会が開催された。幹事を務める鈴木顕在スウェーデン日本国大使館一等書記官、吉原副センター長の呼びかけにより、スウェーデンに滞在する日本人研究者・大学院生等27名が参加した。冒頭、鈴木書記官から開会の挨拶があり、その後、津本センター長から乾杯の発声があった。引き続き、参加者全員が自己紹介をし、参加者の間で親睦を深めるとともに、様々な情報交換を行った。最後に吉原副センター長より、今後も連携を密にとりながら交流し、更なる活躍の場が広がることを期待する旨の挨拶があり、閉会となった。

日本人研究者との集合写真

JSPSサマープログラムプレオリエンテーションの開催

2019年4月26日、スウェーデン研究・高等教育国際協力財団（以下、STINT）において、本年度のJSPSサマープログラムの参加者を対象とした渡航前オリエンテーションが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、吉中国際協力員が参加した。

Hans Pohl STINTプログラムディレクターの開会の挨拶に始まり、参加者による自己紹介が行われた。引き続き、吉原副センター長によるサマープログラム概要及び渡航準備について説明が行われた。その後、2018年度参加者である Christoffer Hemmingsson氏、Anna Martin氏、Javier Cruz氏の3名から体験談の発表及び、質疑応答を行い、最後に津本センター長による閉会の言葉でプログラムが終了した。終了後はランチレセプションが設けられ、リラックスした雰囲気の中、情報交換が行われた。



プレオリエンテーション参加者との集合写真

2019年度JSPSデンマーク同窓会幹部会の開催

2019年5月14日、コペンハーゲン大学において、JSPSデンマーク同窓会幹部会が開催された。デンマーク同窓会からは、Winsløw会長、Anemone Platz副会長、Gunhild Borggreen氏、Lo Leggio氏、Brooks氏が参加した。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、石井現地職員がSkypeを利用して参加した。

2019年度の活動計画が承認されたほか、本年度予定している同窓会セミナーやJapan Alumni and Researcher Assemblyについて意見交換が行われた。

幹部会の様子

セミナー参加者によるレポート

第7回Sweden-Japan Academic Networkに参加して

スウェーデン自然史博物館研究員　河野 美恵子

私の研究対象である地衣類はなんとも不思議な生物で、誰もが見たことがあるのにほとんどの人がその存在を知らない。実は生物というのも正しくはない。なぜなら地衣類とはカビやキノコの仲間である菌類と、光合成をする緑藻あるいはシアノバクテリアが共生することで初めて機能する「共生体」だからだ。と、いうのも実は10年前くらい前までの話。最近ではこれまで考えられてきたよりもずっと沢山のバクテリアや菌類が地衣類という共生体を作るのに必要なのではないか、と言われ始めている。つまり、まだ「誰も」地衣類が「何」なのか知らないのだ。

私は博士課程の学生の頃からこの奇妙なそして美しい存在に魅了され、どんどん複雑になっていく地衣類の共生関係にやや途方にくれながらも研究を続けていたらスウェーデンに来ていた。そのため第7回Sweden-Japan Academic Networkで講演してほしいと連絡をいただいた際は「私にどのような話ができるのか」という疑問がまず浮かんだ。当時はスウェーデンに来てまだ3ヶ月ほど。生活と研究の基盤は整いつつあったもののプロジェクトは始まったばかり、そもそもスウェーデンのプロジェクトで雇われているので日本と交流してない！などとあれこれ思い悩んでいたところをストックホルム研究連絡センターの担当の方や、もう1人の講師を務めたGöran Thor教授に励ましていただき、さらに同僚の「君がスウェーデンにいることが既に学術交流なんだよ」という言葉に後押ししてもらい、胸を借りるつもりで講演させていただくことにした。

結果は予想外だった。もちろん良い意味で。先に御講演されたThor教授が存分に地衣類の魅力について話してくださっていたので私が壇上に上がった時には既に会場の皆さんが地衣類という存在を「面白い」と感じ「もっと知りたい」と思ってくださっていることが伝わってきた。その和気藹々とした空気のお陰で私も緊張はしたものの楽しく日本での研究やこれからのスウェーデンでの研究について話すことができた。また、講演後の質疑応答やレセプションでいただいた沢山のフィードバックによってあれこれと考え過ぎて固まっていた思考がほぐれる心地がした。研究者だけでなく様々なバックグラウンドを持つ人々が互いの活動に興味を持ち耳を傾ける交流会は普段私が参加する学会とはまた異なる刺激を私に与えてくれた。何より嬉しかったのは、もしかしたら参加者の中で一番スウェーデン滞在歴が短かった私に多くの方々が「面白かった」と声をかけてくださり、スウェーデン生活のあれこれを話してくださったことだ。

スウェーデンと日本の学術交流会と聞いた時、ついつい国と国という大きな枠組みを思い浮かべてしまったが、実際に参加してみるとそのベースは人と人との繋がりなのだということが分かった。最後に雪道で車を押し上げるという経験も込みで両国の150年を越える交流の一端を垣間見ることができた思い出深い雪夜となった。

本原稿執筆時の現在、学術交流会に参加してから早1ヶ月が経ち、雪は溶け花が咲き、日は長くなり、日に日に春の訪れを感じている。1月の間にウプサラでの地衣類研究会にも参加したし共同研究者に会うため初めてイタリアも訪れた。その間自分がこれからどこで誰とどのように研究を続けていきたいのかを考え続けている。答えはまだ出ていないし出たとしてもそれは私1人で実現できることではない。しかし、様々な国の研究者と話をする中で日本にいた頃には出会えなかったものの考え方に触れ、毎日約3分早まるストックホルムの日の出ほどではないものの、日々自分の当たり前が変化していくのを感じている。共同研究は研究の幅も広げるし、効率も上げる、そして何より楽しい。願わくばこの先も色々な国、価値観の人々と交流しながら楽しく研究できますように。Jag hålla tummarna！

最後にこのような発表の機会を与えてくださったストックホルム研究連絡センターの皆様、Swedish University of Agricultural SciencesのThor教授にこの場を借りて厚く御礼申し上げる。

講演する河野研究員

セミナー参加者によるレポート

第1回Norway-Japan Alumni and Researcher Gatheringを終えて

オスロ都市大学工学・デザイン・芸術学部情報工学科
前ポスドク研究員　多々良　尚愛

2019年2月6日、ノルウェー・オスロのノルウェー研究評議会（RCN）にて、Norway-Japan Alumni and Researcher Gathering FY 2018が開催された。主催は、ストックホルム研究連絡センター、RCN及びJSPSノルウェー同窓会である。著者はキャリアトークのスピーカーの1人として登壇し、“Being interdisciplinary myself, in a multidisciplinary environment: My experiences as an eHealth-researcher in Norway and Japan”と題して、学際的協業、諸学提携、新しい学問分野の発展やその分野での研究者としての立ち位置などについて、自身の経験を振り返りながら講演させていただいた。

MultidisciplinaryやInterdisciplinaryといった単語は近年特に頻繁に目にするが、これらの定義について曖昧なまま使用されている場合も多く見受けられるように思う。自戒の意味を込めて改めて関連する文献等を調査したところ、適切な日本語に訳すのは非常に困難であるもののそれぞれおよそ次のような定義となる。

Multidisciplinaryとは、異なる学術分野にある研究者が、自身の学術分野の域を出ることなく、それぞれの知識や方法論を以て分野横断的に協業するということ。

Interdisciplinaryとは、異なる学術分野の知識や方法論を齟齬のないように統合し、全体として一貫した形を為しているということ。また、これらの概念を考察するにあたって比較のために用いた、Cross-disciplinary（1つの学術分野を異なる学術分野の知識、方法論を以て捉える）及びTransdisciplinary（伝統的に確立された学術分野の域を超えて、1つの新しい学術的フレームワークとして確立された）についても発表の冒頭でカッコ内のように説明させいていただいた。

これらの定義に照らして自身の従事してきた研究プロジェクトのチーム構成や他研究者との協業の仕方、また所属していた組織における他の研究プロジェクトを振り返ってみると、多くの場合はMultidisciplinaryあるいはCross-disciplinaryであったように思う。一方筆者自身を含め、eHealth分野でのツールやサービスのデザインに関する研究を行っていた情報工学系研究者は積極的に他分野の知識や方法論を取り入れて統合していた点で、各々の研究の仕方そのものがInterdisciplinaryであったと言える。eHealthとは、医療・健康管理分野に活用される情報技術を指すので、eHealth分野における研究が多様な学術分野と密接に関連していることは容易に想像ができるであろう。eHealthは比較的新しい分野なので、Interdisciplinaryに研究に従事してきたeHealth研究者にとっては、例えば研究資金の申請や一般的に自身をどの分野に位置付けるかといった所で難しさがある場合もある。おそらくこれはeHealthに限った話ではなく、近年になって注目されるようになってきた他の分野でも同じことであろう。一方Interdisciplinaryな研究プロジェクトが推奨される昨今、こういった研究者は分野横断的な研究チームを編成するにあたって上手くコーディネートするスキルに長けた貴重な人材になり得ると思う。実際自身もポスドク研究員時代は自ら他分野の研究者に声をかけ、それぞれの持つ知識や方法論を整合性を保ちつつ研究に取り入れることで、上手く協業できていたと自負している。

キャリアトーク終了後のMatch-making sessionでは、参加者のバックグラウンドを鑑みて主催者が事前に構成したグループで、新しい研究テーマの擁立や協業可能性についてのディスカッションを行った。筆者はノルウェー科学技術大学（NTNU）のDepartment of Interdisciplinary Studies of Culture所属の2名の研究者と同じグループになったが、発表した内容に対して「改めてInterdisciplinaryの定義について再確認できた」というフィードバックをいただけたのは幸甚であったし、その後お話しさせていただいた他の参加者からも概ね好評をいただいた。学会発表などの機会では、当該分野以外の研究者との接点はあまりないので、このような機会に新たな研究テーマの可能性を見出し、協業の可能性を探ることができたのは大きな収穫であった。今後JSPSノルウェー同窓会が正式に承認され、同様の機会が設けられればまた是非参加したく思う。

講演する多々良前ポスドク研究員

セミナー参加者によるレポート

第3回Norway-Japan Academic Networkに参加して

北海道大学北極域研究センター准教授　大西　富士夫

2019年2月6日にノルウェー・オスロにあるノルウェー研究評議会（RCN）において、Norway-Japan Academic Networkが開催された。本セミナーは、JSPSとRCNの共催により日本とノルウェーとの間の学術振興を目的として2016年以降毎年ノルウェーにおいて開催されているとのことである。参加者は、ノルウェー在住の日本人研究者、JSPS同窓生、日本に留学経験のあるノルウェー人ら40名程度であった。本セミナーでは、ストックホルム研究連絡センター、RCNを中心とする両国の政府関係者から両国間の学術振興に活用できる種々のプログラムが紹介されると共に、日本での留学／在外研究経験のあるノルウェー人研究者とノルウェーでの留学／在外研究経験のある日本人研究者が後援者として招へいされた。

筆者は、科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究）の助成を得て、2018年9月から2019年3月までノルウェー防衛研究所において客員研究員としてオスロに滞在していたという経緯から、本セミナーに招へいしていただいた。

本セミナーは15時から2時間半で開催され、その後レセプションが催された。冒頭、ストックホルム研究連絡センターの津本忠治センター長が開催の挨拶を述べられ、同センターの活動が紹介された。次に、RCN国際部のJulie Christiansenシニアアドバイザーからの研究戦略についての説明があり、日本との研究協力の分野はまだ限定的であるが、今後両国間の研究協力が進展することについての期待が述べられた。次に登壇したノルウェー国際協力・高等教育推進庁（Diku）のArne Haugenシニアアドバイザーから、ノルウェーにおいて日本への留学を含む学生交流プログラムについての紹介が行われた。在ノルウェー日本国大使館の山森健成広報文化担当官からは、文部科学省において実施されている外国人留学生向けの奨学金が紹介された。

留学／在外研究経験者による講演では、まず筆者がノルウェー政府奨学金によるバレンツ研究所での研究滞在（2008-2009）、ノルウェー防衛研究所での研究滞在（2018-2019）について簡単に紹介し、現在の研究テーマである北極国際政治の概要を紹介した。次に登壇したベルゲン大学のIvar Rønnestad教授は、過去の京都大での研究活動の様子と近年の学生たちを含めた研究交流について紹介した。3人目の講演者であるスタヴァンゲル大学のAlexander karl Rothkopf准教授は、東京大学での留学体験を紹介しつつ、専門の高能核物理について分かり易く説明した。

その後、JSPSノルウェー同窓会会長のAnders Øverby氏が自身の日本への留学経験と共に同会設立経緯並びに最近の活動の様子を紹介した。最後に講演者4名が登壇し、ノルウェーと日本の研究交流を促進していくための方策などについて、パネル討論が行われた。

今回、ノルウェー在住の日本人研究者の方も多く参加されており、懇親会ではネットワーキングの大変貴重な場となった。この機会をいただいたストックホルム研究連絡センター及びRCNにこの場を借りて感謝申し上げる。

講演する大西准教授

パネルディスカッションの様子

セミナー参加者によるレポート

All Alumni Meetingに参加して

トゥルク大学シニア研究員　中村　美穂

フィンランドのヘルシンキにおいて2019年3月1日に開催されたAll Alumni Meetingに参加した。本学術セミナーはフィンランドー日本間の学術交流を促進するために企画されたイベントであり、日本・フィンランド外交関係樹立100周年を記念して行われた。本記念事業は、JSPSフィンランド同窓会、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス、ストックホルム研究連絡センターが主催し、在フィンランド日本国大使館後援のもとに開催された。フィンランド国内の様々な人文系、自然科学系研究分野から、フィンランド人研究者、日本人研究者が多数参加していた。

当日は、吉原誉夫氏（ストックホルム研究連絡センター）のJSPSのプログラムと活動内容の紹介に始まり、田畑伸一郎氏と岡部赴大氏（北海道大学欧州ヘルシンキオフィス）による北海道大学の欧州における活動紹介、Henna Tanskanen氏（在フィンランド日本国大使館）による国費外国人留学制度（文部科学省）についての紹介、Ulla Ellmén 氏（フィンランド・アカデミー）からフィンランド・アカデミーのシステムと取組の紹介が行われた。フィンランドと日本の研究交流を強化する上で、フィンランド・アカデミーとJSPSのシステムについて理解することは重要であると感じられた。

引き続き、武田靖教授（チューリッヒ連邦工科大学／北海道大学）による“Essential difference between Science and Technology – Practitioner’s view”についての御講演が行われた。サイエンスとテクノロジーの相違について、様々な側面からの解釈を御講義くださった。個人的には、西洋と東洋の哲学的解釈の相違が大変興味深く感じた。エネルギッシュで引き込まれるプレゼンテーションに時間が経つのを忘れ、あっという間の40分間であった。

その後、“Artificial bones for tissue regeneration - Multidisciplinary collaborations between Finland and Japan-”というタイトルで講演させていただいた。

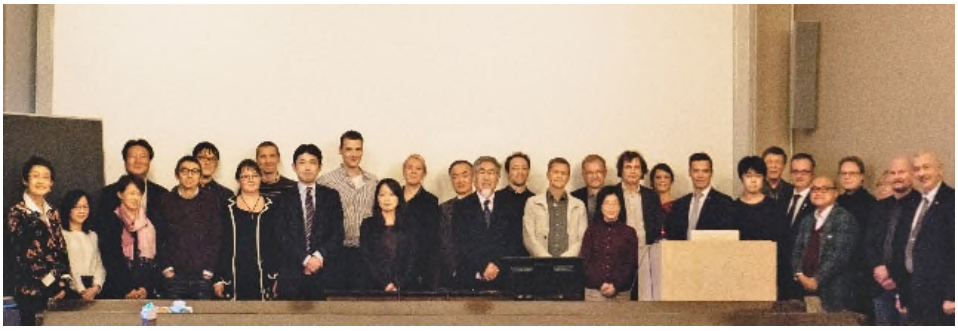
私は2010年、東京医科歯科大学に助教として勤務していた際、JSPS優秀若手研究者海外派遣事業の支援をいただき、在外研究を行った経験がある。その際の共同研究成果がきっかけとなり、フィンランドのオウル大学から客員教授のお誘いをいただき、半年間の在外研究を行った。2016年にJSPS国際共同研究加速基金の支援を受け、さらに共同研究を強化することができた。当時東京医科歯科大学に准教授として勤務していたが、大学側の理解ももちろんのこと、本基金は在外時の教育・研究業務をサポートしてくださったことが、大変有難かった。このように、周囲の皆様とJSPSの御支援のおかげもあり、フィンランドと日本の共同研究を継続することができた。感謝の気持ちを示すべく、その経緯と約9年にわたる骨粗鬆症治療におけるバイオマテリアルと骨再生研究についてお話した。

最後の御講演は、Elina Oksanen 教授（東フィンランド大学／JSPSフィンランド同窓会幹部会委員）による“Forest trees under climate change - using Big data and hyper spectral imaging in genetic research” であった。非常に多くの興味深いトピックスが紹介されたが、個人的には、光合成がフィンランド北部の白樺で高効率であること、タバコ葉の感染を可視化する技術が興味深かった。

閉会の辞の後にはレセプションが開催され、講演者のみならず、聴衆として参加された研究者の方達と交流することができた。本セミナーに参加することにより、微力ではあるが、今後もフィンランドと日本の研究交流に尽力していきたいと改めて感じた。

最後になるが、これまで両国の共同研究を進める上で御支援くださった東京医科歯科大学の関係者の皆様、JSPSからの資金援助に、そして、今回講演する機会をいただいたことに心から感謝したい。

講演する中村シニア研究員



参加者との集合写真

セミナー参加者によるレポート

第4回Japan Alumni and Researcher Assemblyに参加して

北海道大学大学院農学研究院教授　森　春英

2019年3月15日、デンマークにおいて標記セミナー（JARA2019）が開催された。筆者は幸運にもここで講演する機会をいただいた。本稿ではJARA2019についてレポートしたい。

JARA2019は、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会、JSPSデンマーク同窓会（ACD）、及びストックホルム研究連絡センターにより主催され、コペンハーゲン中心部から北へ12 km程のデンマーク工科大学（DTU）で開催された。開催挨拶、主催者からの各種情報提供に続き、講演2題、そしてパネルディスカッションが行われた。筆者は日本側からの講演1題を担当した。まず、筆者の20年以上にわたるBirte Svensson先生（現DTU教授、当初はカールスバーグ研究所）との学術交流を紹介した。糖質関連酵素研究の世界的トップランナーSvensson先生に、ほぼ毎年北大に来訪いただいている。講演や学生らとの個別ディスカッションを通し、研究交流とともに学生意識の向上など教育面でも高い効果をあげている。Svensson先生の下でポスドクを経て現在大学教員として活躍する卒業生等は4名にのぼる。幅広いSvensson先生の人脈を通して、研究者との交流も広がった。ACD幹部会委員のMaher Abou Hachem・DTU教授もその一人である。身近な両国間の交流実績を、Svensson先生への感謝も込めて紹介した。私の講演の学術的主要な内容は、糖質の酵素利用による多様化についてである。糖質はレゴブロックに例えることができる。構成糖（ピース）と結合様式の種類組合せによりいくらでも多様な構造をとりうる。筆者らが進める研究例として、構成糖異性化酵素と加リン酸分解酵素2種を紹介した。酵素自体の学術研究に加え、酵素利用によって機能性食品素材、飼料用抗生物質代替品、並びに植物生長調節剤などの機能性糖質を合成できる。実用性上も魅力的な研究分野であることを御理解いただけたと思う。講演の最後のパートでは、北大が進める農食分野に資する研究（ロバスト農林水産工学研究開発。無人で協働できるトラクター等）と、教育活動として大学院国際食資源学院を紹介した。本学院では、修士1年全員がデンマーク国オーフス大学サマースクールでの農業・地域・環境の実地研修に参加している。駐日デンマーク大使館にもレクチャー等の協力をいただいている。組織的な交流実績として紹介させていただいた。

2題目の講演は、コペンハーゲン大学Leila Lo Leggio教授によった。タンパク質結晶構造研究者として高エネルギー加速器研究機構放射光実験施設や北大を訪れている教授からは、タンパク質の構造（形）の重要性を踏まえた上でバイオマス分解に関わる糖質代謝酵素ついて講演が行われた。

パネルディスカッションは、Contribution of academic research, particularly collaboration between Denmark and Japan, for solving global food and environmental challenges and promoting “sustainable use of resources”をトピックとして、パネリストは筆者、Lo Leggio教授、Svensson教授、Henrik Gudmundsson シニアコンサルタントの4名で行われた。資源の確保、より良い利用、共同研究の持続に寄与する仕掛け等についてパネリストだけでなく聴衆も交えて議論が行われた。

今回、JARA2019での講演など貴重な機会をいただいた。またデンマーク国を久々に訪れ、JARA2019の前日にはDTU Department of Biotechnology and Biomedicineでの講演や、学生・スタッフとの個別ディスカッションなど研究交流を行うことができた。主催者皆様、特にAbou Hachem教授とJSPSスタッフの皆様には大変お世話になった。重ねて御礼申し上げたい。

講演する森教授

訪問・来会記録

関係機関への訪問

在ノルウェー日本国大使館訪問（2019年2月7日）

在ノルウェー日本国大使館を訪問し、田内正宏在ノルウェー日本国大使と面会した。前日に開催されたNorway-Japan Academic Networkに参加するためにノルウェーを訪問し、その一環で津本センター長、吉原副センター長、伊藝国際協力員が同大使館を訪問した。ストックホルム研究連絡センターからは同国と日本の学術交流促進に向けた連携と協力を依頼した。田内大使から、必要な協力を惜しまないとの意向が示された。

左端：田内在ノルウェー日本国大使

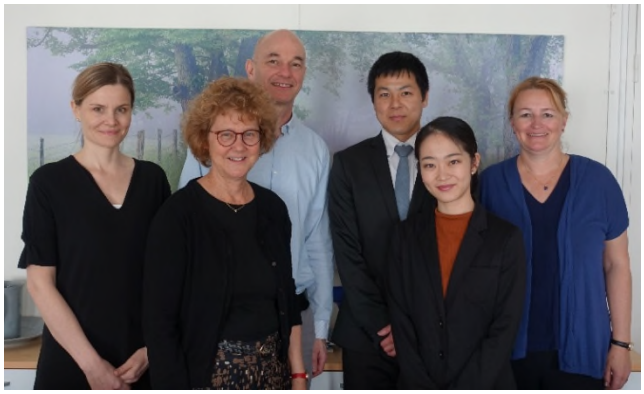
在スウェーデン日本国大使館訪問（2019年4月12日）

新しく着任した国際協力員を紹介するため、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員が在スウェーデン日本国大使館を訪問し、鈴木顕一等書記官と面会した。着任挨拶の後、同書記官より大使館の業務内容等について説明を受けた。また、本年度開催される大使館と当センターとの共催イベントや在スウェーデン日本人研究者の支援について、引き続き連携していくとの認識を共有した。

中央：鈴木一等書記官

ストックホルム大学訪問（2019年4月25日）

新しく着任した国際協力員を紹介するため、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員がストックホルム大学の研究支援オフィスを訪問し、Maria Wikse国際課長、Elisabet Idermark国際関係シニアアドバイザー、Niklas Tranaeus国際シニアコーディネーター、Johanna Wiklund国際シニアコーディネーターと面会した。着任挨拶の後、同大学の概要について説明を受けた。また、日本とスウェーデンの大学間連携プログラムであるMIRAIプロジェクトの活動やストックホルム3大学と東京大学のパートナーシップに係る協定締結後の活動状況等について情報提供があった。今後の更なる学術交流の促進と研究者支援の強化のために情報を共有し、連携を図ることを確認した。



左から1番目：Wiklund国際シニアコーディネーター
左から2番目：Idermark国際関係シニアアドバイザー
左から3番目：Tranaeus国際シニアコーディネーター
右端：Wikse国際課長

訪問・来会記録

カロリンスカ医科大学（KI）訪問（2019年5月9日）

新しく着任した国際協力員を紹介するため、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員がカロリンスカ医科大学（KI）を訪問し、Lotta Lundqvist国際コーディネーターと面会した。着任挨拶の後、同大学の概要について説明を受けた。加えて、東京大学や理化学研究所を始めとする日本の学術研究機関との連携の取組などについて情報提供があった。今後も日瑞間の学術交流の促進に向けて連携していくとの認識で一致した。

中央：Lundqvist国際コーディネーター

ストックホルム研究連絡センターへの来会

宮園　浩平 東京大学副学長の来会（2019年5月6日）

宮園浩平東京大学副学長とポスドク研究員1名が来会した。同副学長は、東京大学とカロリンスカ医科大学（KI）との更なる学術交流の促進に向けて打合せを行うために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。東京大学とストックホルム3大学との間で戦略的パートナーシップに係る協定締結後の取組や今後の同大学の国際戦略について情報提供があった。

右端：宮園副学長

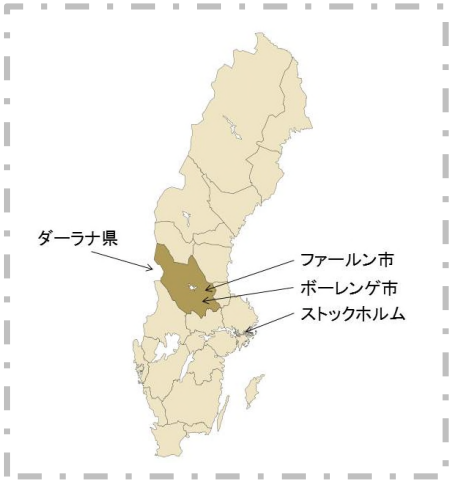
打合せの様子

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

ダーラナ大学（Dalarna University）

お土産で有名な伝統工芸品のダーラナホースの発祥地でもあるダーラナ県にある国立大学。人文・メディア学部に設置されているオンラインでの受講が可能な日本語学科が人気の学部の1つ。スウェーデン国内で日本語を主専攻とする日本語学科が設置されている大学は、ストックホルム大学、ヨーテボリ大学、ルンド大学に次いで4つめ。また、地域産業やビジネスとの結びつきが強く、学生の就職率の高さは国内有数を誇る。

1. 組織概要
○設立：1977年
○学校種：国立
○キャンパス：ファールン市とボーレンゲ市の2つ
○学長名：Martin Norsell
○学生数：約14,100名（うち、全学生の約65％に相当する約9,000名が遠隔教育を受講）
○大学間協力協定：約10か国の約210大学と協定を締結
○教職員数：約800名
○収益：約8億スウェーデンクローナ（*約84億円）
○設置学部：「教育・健康・社会学部」、「人文・メディア学部」、「工学・ビジネス学部」の各学部、大学院修士課程及び博士課程レベルの3つのプログラムを提供。オンラインでは学士号、修士号の取得が可能。

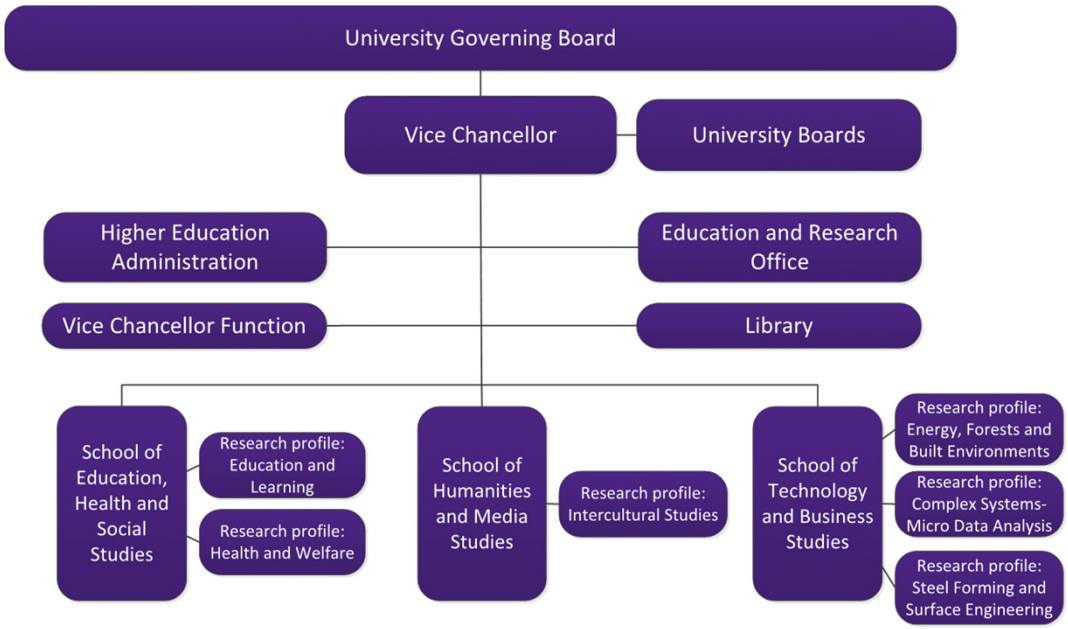


○教育の特色：
・オンライン教育が充実しているため、学生はスウェーデン国内だけではなく、世界各地から受講することができる。このため、留学生対象のプログラムが豊富に用意され、学士課程の1プログラム、修士課程の11プログラムは英語のみで授業が実施されている。
・留学生対象のコースとして、①ビジネスと観光学、②データサイエンスとビジネスインテリジェンス、③留学生のための英語、④テクノロジーと工学の4つが設置されている。
○主要な研究テーマ：「複雑系：マイクロデータ分析」、「教育と学習」、「エネルギーと建築環境」、「健康と福祉」、「異文化研究」、「鉄鋼工学と表面工学」
○その他：
・エラスムス・プラス（Erasmus+）などの国際的なプログラムにも積極的に関与しており、これらのプログラムを通じて欧州連合（EU）やEU域外から多くの留学生が学ぶ要因にもなっている。
・2019年にスウェーデンで最も有名な映画祭SKFF（Sweden's Short-Film Festival）で最優秀賞を獲得。

Martin Norsell学長

【出典】Dalarna University
https://www.du.se/sv/om-oss/nytt-och-aktuellt/nyheter/rektor-martin-norsell-pa-plats-lockande-att-leda-en-hogskola-i-framkant/

○組織図



2. 日本との関わり
以下の3大学と大学間協力協定を締結
・神田外語大学
・関西外国語大学
・宮城教育大学

「知のスパイラルを空間デザイン化」した図書館

【出典】Dalarna University
https://www.svt.se/nyheter/lokalt/dalarna/antalet-internationella-studenter-okar

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

ノルウェー研究評議会（RCN：Research Council of Norway）

ノルウェー最大の研究助成機関。2018年度の年間の助成金総額は約1,260億円。JSPS本部とは、「研究者交流事業（特定国派遣研究者）」における研究者交流や、「外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員・一般）」等を通して連携。また、ストックホルム研究連絡センターとはNorway-Japan Academic Networkの共催等を通して連携。

1．組織概要
○設立：1993年
○理事長：Hilde Tonne
○事務局長：John-Arne Røttingen
○職員数：約500名
○主な取組：
　①研究・イノベーションに係る助言
　　・政府や研究機関に対する一般的な助言のほか、優先分野に係る助言
　②ノルウェー人研究者の国際的な活躍の支援
　　・EUの助成プログラムにおける研究の支援
　　・EU域外の8つの国（アメリカ、カナダ、インド、日本、中国、ロシア、ブラジル、南アフリカ）と研究・イノベーションの促進に係る二国間協定を締結し、ノルウェーの研究者・機関と相手国の研究者・機関との交流を促進
○組織：最高意思決定機関である理事会の下、7つの関係部局で構成
○助成金総額：98億ノルウェークローネ（* 約1,260億円）（2018年度）
○組織図：

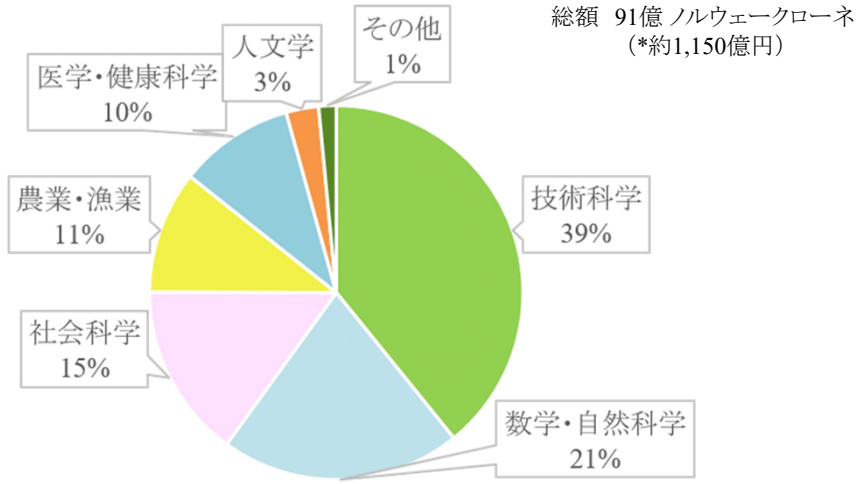
John-Arne Røttingen事務局長

【出典】Research Council of Norway
https://www.forskningsradet.no/en/about-the-research-council/pressekontakt/

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

2. 助成プログラムの概要
①産業界と公共部門での研究プロジェクト（Doctoral projects in industry and the public sector）
・公的・民間機関が大学と連携し、研究を行うための助成金
②フェローシップ助成（Fellowship grants）
・研究機関を対象とした助成金
③博士課程、ポスドク研究員対象のフェローップ助成（Doctoral and post-doctoral research fellowships）
・博士課程、ポスドク研究員を対象とした助成金

2017年度における助成金の分野別の配分



【出典】Nøkkeltall
https://www.forskningsradet.no/en/statistics-and-evaluations/tall-og-statistikk/

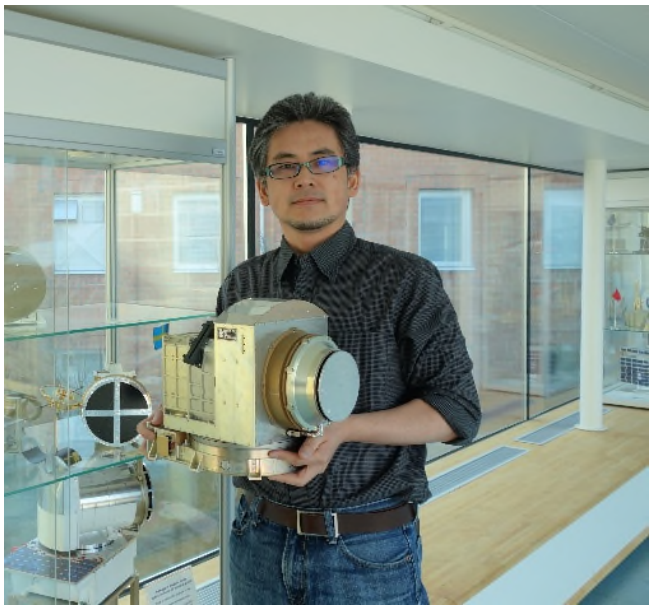
3. 日本との関わり
○日本学術振興会「研究者交流事業（特定国派遣研究者）」における研究者交流のノルウェーの対応機関として、推薦及び審査を担当
○日本学術振興会「外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員・一般）」において、ノルウェーの対応機関として推薦及び審査を担当
○2016年度から、ストックホルム研究連絡センターと共催により、Norway-Japan Academic Networkをこれまで3回開催
○2019年度から、JSPS、RCN、Dikuとの共催により、新たな学術セミナーを開催予定
○日本との研究において、二国間協定に基づき、①エネルギー、②材料科学・ナノテクノロジー、③海洋研究、④宇宙研究、⑤気候研究、⑥極地研究の6つを優先分野と位置付け、両国の研究交流を推進

4. 国際連携
○世界最大の研究・イノベーションの助成プログラムHorizon2020や欧州経済領域（EEA）、ノルウェー国内の助成プログラム等を通したノルウェーの研究者・機関の支援及び国際的な研究交流の促進
○二国間協定を締結した前述の8か国と優先分野に基づき、助成プログラムや共同研究の実施

北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

今回は、2003年4月からスウェーデン・キルナにあるスウェーデン宇宙物理研究所（IRF）で活躍されている二穴喜文さんを紹介する。

二穴　喜文　（ふたあな　よしふみ）



略歴：

1998年 3月	京都大学理学部理学科卒業
2000年 3月	京都大学大学院理学研究科修士課程修了
2003年 3月	京都大学大学院理学研究科博士課程修了　博士（理学）号取得
2002年 4月 - 2004年 3月	京都大学大学院理学研究科　（日本学術振興会 特別研究員（DC2／PD））
2003年 4月 - 2006年12月	スウェーデン宇宙物理研究所　客員研究員
2004年 4月 - 2006年 3月	スウェーデン宇宙物理研究所　（日本学術振興会 海外特別研究員）
2006年 4月 - 2006年12月	宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部　（日本学術振興会 特別研究員（PD））
2007年 1月 - 2015年10月	スウェーデン宇宙物理研究所　シニア研究員
2015年11月 - 現在	スウェーデン宇宙物理研究所　准教授（宇宙物理）

Q: 現在、スウェーデンではどんな研究をされていますか？
簡単に教えてください。

A: 太陽系がどのように進化、発展し、今に至り、さらに今後どうなっていくのか解き明かすことを目標にしています。これを達成するため、惑星探査用の人工衛星に搭載する観測器を設計、開発、運用し、取得したデータを解析することで、宇宙空間における物理現象が太陽系の天体にどのような影響を与えているのかを調べています。

IRFが所在するキルナ。スペースキャンパスの、氷で作られたモニュメント

北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

Q: 現在の研究分野に興味を持ったきっかけを教えてください。

A: 宇宙空間には目に見えないプラズマ（電離した非常に薄い大気）が存在します。例えば、スウェーデン・キルナでも見られるオーロラは、宇宙空間における物理現象が、プラズマによって仲介され、地球の大気に映し出されたものです。このような現象が地球以外の惑星でどうなっているのかを知りたいという好奇心がきっかけです。

研究所のセミナーで司会を務める筆者

Q: 現在の所属機関を選択した理由は何ですか？

A: 日本の火星探査機のぞみに刺激を受け、学位取得後は火星の研究をしたかったのですが、のぞみは火星に到着できず観測ができませんでした。その時点で、過去の探査から火星での観測データを持っていたのは、世界中でアメリカ航空宇宙局（NASA）と現在私が所属するIRFだけでした。このうち、当時最新となる観測器を火星で運用開始する予定があったIRFを選択しました。

Q: 研究を行う上での一番の課題を教えてください。

A: 私の研究対象である宇宙プラズマは目には見えません。さらにプラズマは、目に見えない電磁場とエネルギーを交換し、その運動を変えます。このようなダイナミックな現象を、限られた人工衛星の観測データから時に大胆な予測を立て、検証していくのがスリリングな課題です。

オフィスから撮影されたオーロラ。
キルナ市街地の上空を彩る

Q: 日本と比べて、スウェーデンの研究環境について、どのような印象をお持ちですか？

A: 我々の分野は国際協力が進んでいることもあり、日常の研究を行うにあたっては大きな違いはないように思います。システム面では研究時間の短さが挙げられるでしょうか。基本的に1日8時間で切り上げる上、1日2回のコーヒータイム（フィーカ）があります。夏季休暇が4～6週間で、研究所はその時期、人がおらずとても静かです。この条件の下で世界トップレベルの研究、教育を行いつつ、家庭生活と両立していくのは、なかなかチャレンジングです。

Q: 最後に、これからスウェーデンで研究を始めようと考えている研究者にメッセージをお願いします。

A: IRFがあるキルナはスウェーデン最北、北極圏内に位置し、冬はオーロラ、夏は白夜と、日本の四季とは異なる自然が楽しめます。一方で、自らを高め、業績を積み、同僚と協力しながら成果を出していくという研究プロセスに変わりはありません。なお、スウェーデンには日本好きな人が多く、日本の話題を好まれますので、日本文化や歴史、日本語などについて、客観的に語れるように造詣を深めると良いと思います。

学術動向

スウェーデン：2019年度ノーベル賞発表日程の決定

2019年度ノーベル賞発表日程が決定し、ノーベル財団ホームページ上で公表された。今回発表されたのは「医学・生理学賞」「物理学賞」「化学賞」「文学賞」「平和賞」「経済学賞」の日程である。文学賞については、2018年度、2019年度の受賞者が併せて発表される予定。

医学・生理学賞

日時：2019年10月7日（月）11：30

場所：カロリンスカ医科大学（KI）

物理学賞

日時：2019年10月8日（火）11：45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）

化学賞

日時：2019年10月9日（水）11：45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）

文学賞

日時：2019年10月10日（木）13：00

場所：スウェーデンアカデミー

平和賞

日時：2019年10月11日（金）11：00

場所：ノルウェーノーベル委員会

アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞（経済学賞）

日時：2019年10月14日（月）11：45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）

【参考】ノーベル財団ウェブサイト

https://www.nobelprize.org/prizes/about/prize-announcement-dates

スウェーデン：中西友子氏（東京大学大学院特任教授）がチャルマース工科大学より名誉博士号授与

中西友子氏は、東京大学大学院農学生命科学研究科特任教授で、日本工学アカデミー副会長、日本放射化学会会長も歴任。同氏は、植物生理学に関する優れた学際的研究を行うとともに、この目的を達成するための画期的な新しい画像法の開発、並びに福島原発事故による被災地での農業や環境への影響の調査と復興計画が今回の名誉博士号の授与に繋がった。チャルマース工科大学、ヨーテボリ大学の研究者と共同研究を行っており、これまで何度かチャルマースを訪問しただけでなく、同大学の研究者を日本にも迎え入れた。2015年にスウェーデン王立工学アカデミー（IVA）、2017年にスウェーデン王立科学協会ヨーテボリ（KVVS）の外国人会員に選出。

このほか、Atilla Incecik氏（ストラスクライド大学教授）、Olof Bergstedt氏（チャルマース工科大学兼任教授）にも同時授与。

3名は、本年5月18日に、ヨーテボリ・コンサートホールで開催される名誉学位授与式で学位を授与される予定。

中西特任教授

【出典】星薬科大学
http://www.hoshi.ac.jp/site/gaiyou/gakuchoaisatsu.php

【出典】Chalmers University of Technology
https://www.chalmers.se/en/news/Pages/Plants,-drinking-water,-and-marine-technology-%E2%80%93-2019s-honorary-doctorates.aspx

学術動向

スウェーデン：大学資金の抜本的な見直しを提案

2019年2月1日、大学のガバナンスと資金に関する調査委員会（STRUTEN）の政府調査官を務めるPam Fredman教授は、Matilda Ernkrans新スウェーデン高等教育・研究担当大臣に報告書を提出した。
本報告書の目的は、スウェーデン国内外の高等教育関係者が直面している困難に対処することによって、同国を世界有数の研究、イノベーション立国たらしめ、その結果、質の高い研究、高等教育、イノベーションが社会と福祉の更なる発展に寄与し、社会の発展に競争優位性をもたらすガバナンスの形態を発展させることである。

本報告書の主な内容は以下の通り。

- 学問の自由の程度
- 教育機関の自治性
- 専門分野に特化した大学か幅広い分野の教育を行う大学のいずれを設立すべきかの選択
- 資金調達の問題における長期的な予測可能性の必要性
- 教育と研究における地域連携の重要性
- 教育と研究の質保証
- 研究において高等教育をより根づかせる必要性
- 男女平等の問題
- 国際競争の激化
- 大学の資金調達メカニズムを見出す必要性
- 魅力的な研究とインパクトファクター
- 研究とイノベーションの強固な連携
- これまで大学に進学しなかった層の獲得と勧誘

報告書は高等教育の資金モデルの全面的な見直しを提案している。現行のシステムは、各コースの生徒数に応じて、コースごとに資金が割り当てられているが、これは厳しく批判されている。
具体的には、政府と議会に対して、政府からの研究費のうち直接経費の割合を今後8年間に現行の全研究費の44%から、少なくとも50%に引き上げるための目標の設定と計画の作成を促した。
今後は、政府によって報告書の内容が再検討されるとともに、2020年に議会提出される前にすべての利害関係者に意見照会をする予定。

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190214103125883

スウェーデン：VRが二国間交流事業に160万SEKを支援

二国間交流事業は、JSPSと海外の対応機関との学術の国際協力に関する合意に基づいて行われ、日本の研究者が相手国の研究者と共同研究やセミナーを実施するもので、スウェーデンの対応機関はスウェーデン研究・高等教育国際協力財団（STINT）が務めている。
2019年3月18日、STINTは2019年～2022年の同事業における日本とスウェーデンの共同研究に対して、同国の研究助成機関であるスウェーデン研究評議会（VR）が、160万スウェーデンクローネ（*約1,900万円）の資金援助することを発表した。これらの資金は、2019年から開始される3つのプロジェクトのスウェーデン人の研究費に充てられる。これに対して、日本人研究者の研究費はJSPSから同額程度が支給される。共同研究に対する支援期間は最長で3年間。

【出典】STINT
https://www.stint.se/en/2019/03/18/stint-och-vetenskapsradet-beviljar-16-mkr-till-forskningssamarbeten-med-japanska-universitet/

学術動向

スウェーデン：AIに係る国家的アプローチの策定

2019年2月18日、スウェーデン政府は、AI（人工知能）に係る国家的アプローチを公表した。

スウェーデンは、「ITの浸透が、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる」というデジタルトランスフォーメーションの概念を活用して、デジタルテクノロジーの分野で、世界の先端を走ることを目指している。この分野で急速に進展しているのがAIだ。AIは、多くのテクノロジーを包含する幅広い分野で、経済成長の促進、環境・社会的課題の解決を通じて、様々な分野で大きな恩恵をもたらす可能性を秘めている。ただし、その恩恵が自然とスウェーデンにもたらされるわけではない。

このような状況を受け、政府は、スウェーデン国内のAIに関する包括的な取組の方向性と将来的な優先事項の土台を構築するため、本ガイドラインを策定した。

ガイドラインでは、AIがもたらす可能性を実現するための重要な要件として、①教育と研修、②研究、③イノベーションとAIの活用、④円滑な運用に向けた規則・ルールの策定と基盤整備の4点を掲げている。

ガイドライン（英語）の全文は、以下を参照。
https://www.government.se/491fa7/contentassets/fe2ba005fb49433587574c513a837fac/national-approach-to-artificial-intelligence.pdf

【出典】Government Offices of Sweden
https://www.government.se/information-material/2019/02/national-approach-to-artificial-intelligence/

Gerd Altmann（https://pixabay.com）

ノルウェー：大学の合併による高等教育への影響

2019年2月、大学の学長、政府関係者、政治家等の関係者189名が集まり、ノルウェー科学技術大学（NTNU）で会合を行った。会合では、国内で過去最大規模の合併を経験したNTNUのフォローアップ調査の報告書に基づき、2014年から2018年にかけて実施された大学の構造改革について議論された。

報告書には、合併のもたらした影響として、大規模な調査研究が可能になった反面、行政支援機能や意思決定プロセスが集中し、柔軟性が失われたことが明記されている。また、大学職員の大多数が合併に反対で、大学ブランドの損失と学術的地位の弱体化に懸念を示したことが言及されている。

大学の合併を巡っては国内でも賛否両論ある。Rune Nilsenサウスイーストノルウェー大学教授は、「サイエンスを基盤とする大学を発展させる上で非常に有益で、それが古い概念を解体し、現代における大学の概念を理解することに寄与している」と述べている。また、カルマル大学学長も歴任したスウェーデン教育科学省元事務次官のAgneta Bladh氏は、合併し新たなビジョンを設定する前に十分な議論が必要であり、早急な解決策はないことを主張している。

ノルウェーでは、合併により大学数が2014年の33から2018年の21に減少し、この状況は今後数年続くと予想されている。

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190306102946 79

学術動向

ノルウェー：クォーター制度廃止の検証

2016年の議会で、南半球や東ヨーロッパからの学生に対して、1,100件の助成金を提供するクォーター制度の廃止が決定されて以降、ノルウェー政府は、本制度の検証を行っている。

同制度の廃止により、貧困国からの学生の数が大幅に削減され、アジアからの裕福な学生が増加した。これにより、大学の対応の変更を余儀なくされたと危惧する学長もいる。

後継プログラムとして、NORPART（=Norwegian Partnership Programme for Global Academic Cooperation）が実施された。前プログラムは個別の学生への助成金であったのに対し、後継プログラムは機関間の学術連携と学生間交流の促進に焦点を当てたプログラムであり、政党間でも評価が分かれている。

クォーター制度の廃止に伴う否定的な影響として、ベルゲン大学の2人の副学長Annelin Eriksen氏とOddrun Samdal氏は、クォーター制度下では、年間約100名だった留学生が、廃止以降は3か月で20名未満となり、学生や大学職員と良好な関係を構築することが困難になったこと、そして、入学時期がそれぞれの学生で異なることにより住宅の確保が大きな負担になっていることを指摘している。

一方、肯定的な影響として、サウスイーストノルウェー大学の学科長を歴任し、ベルゲン大学元副学長のRune Nilsen教授は、ノルウェーの教育機関で博士課程の学生が現地の優秀な研究グループに加わり、これがノルウェーの研究に良い影響を及ぼしたことを言及した。これにより、ノルウェーの機関が当該学生の在籍機関とのパートナーシップの強化につながった。

クォーター制度の再検討・再構築は、開発途上国に対する開発援助プログラムではなく、ノルウェーの大学活動の中核を担うことが期待される。

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190328141537136

デンマーク：学術研究者に求められる信頼性の高いキャリアパス

デンマークの研究・イノベーション政策評議会（DFiR）が発表した新しい報告書は、現状の大学による研究者の採用パターンが、長期的には大学の研究の質を低下させると警鐘を鳴らしている。

昨今のデンマークの大学では、任期付き雇用の研究者の数が急増しており、大学研究者の2人に1人が任期付き雇用となっている。また、研究職のほとんどが公募されておらず、仮に公募されたとしても大学の多くが独自の採用基準を持っており、応募者がほとんどいないのが現状である。

このような状況を改善するために、DFiRは以下の6つの提言を行った。

- キャリアパスのより一層の透明性の確保
- 若手研究者の民間部門への雇用に向けたキャリアカウンセリングの実施
- テニュアトラック制の導入
- 広く公平に国際的な観点から行われる採用の実施
- 終身雇用保証のない任期付き雇用研究職の段階的な削減
- 正規雇用研究者が外部資金による研究を実施するための資金の創設

特に、DFiRは広く公平に国際的な観点から行われる採用の必要性を訴えている。透明性が確保された採用プロセスの中で、広く公募によって研究者を採用することが、デンマークの研究者に新たなキャリアパスを提供するだけでなく、同国の研究の発展に貢献すると期待される。

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190130150236330

学術動向

フィンランド：研究基盤整備委員会の新たな委員を任命

2019年4月11日、フィンランド・アカデミー（AKA）理事会は、研究基盤整備委員会の新たな委員を任命した。同委員会の主な業務は、フィンランド及び国際的な研究基盤活動の注視と開発に加え、AKA委員会に対する長期的な研究インフラ計画の提案、研究助成金で支援を受けるプロジェクトの審査及び当該プロジェクトの経過の監視。

委員長は、AKA理事長のRiitta Maijala氏、副委員長は、フィンランド教育文化省科学政策局長のErja Heikkinen氏が務める。任期は同年7月1日から2022年6月30日。詳細な委員名簿は以下を参照。

【出典】Academy of Finland
http://www.aka.fi/en/about-us/media/press-releases/2019/the-board-of-academy-of-finland-appointed-the-new-finnish-research-infrastructure-committee/

Free-Photos（https://pixabay.com）

バルト三国：教育と研究について議論

2019年2月8日、エストニア議会で、エストニア、ラトビア、リトアニアのバルト三国の議会に設置された教育・科学・文化委員会が開催された。主な議題は、関係国の調査研究プロジェクト、高等教育機関の連携及び職業教育。

委員会では、エストニアの国会議員で、本委員会の委員長を務めるKrista Aru氏から、欧州連合（EU）から助成される研究助成金の今後の在り方に注視していくことが述べられたほか、新たに開始される政府間での研究プロジェクトに関する意見交換が行われた。

とりわけ重要な議題は、バルト三国の文化基金に関するものであった。本基金は同委員会の主導・勧告のもとに設立され、2019年の初めに首尾よく運用が開始された。Aru氏によれば、本基金は、「バルト三国の国民のアイデンティティーと尊厳を守り、彼らの文化的功績を促進する」ことに寄与するもので、バルト三国間の更なる連携の促進と新たな文化プロジェクトの発展に向けての重要な一歩と位置付けられている。

【出典】The Baltic Times
https://www.baltictimes.com/baltic_assembly_committee_to_discuss_research__education_in_tallinn/

（注）掲載内容は、ストックホルム研究連絡センターにおいて仮訳し、本文に記載のない箇所で説明が必要な個所を追記したものである。なお、*については当センターで円換算（概算）した金額である。

お知らせ

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催については随時ホームページでお知らせしています。詳細は、ストックホルム研究連絡センターHP（https://www.jsps-sto.com/events/category/events/）を御覧ください。最新情報を御希望の方は以下のURLから登録してください。
https://www.jsps-sto.com/contact-us/

●2019年度第1回KVA-JSPSセミナー
日時／会場：2019年6月10日（月）カロリンスカ医科大学
2019年6月11日（火）ウプサラ大学
講師：吉村 崇氏（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）

●2019年度第2回KVA-JSPSセミナー
日時／会場：2019年6月13日（木）AlbaNova University Center
2019年6月14日（金）ウプサラ大学
2019年6月18日（火）AlbaNova University Center
講師：福来 正孝氏（東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構上級科学研究員）

公募中の事業

●令和2年度外国人研究者招へい事業（外国人招へい研究者（長期、短期））
外国人研究者招へい事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。
https://www.jsps.go.jp/j-inv/boshu/2020boshu.html

●令和2年度外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員（一般、欧米短期））
外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員）は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。このプログラムは、外国人特別研究員の研究の進展を援助するとともに、我が国及び諸外国における学術の進展に資することを目的としています。
https://www.jsps.go.jp/j-fellow/index.html

●令和元年度採用分特別研究員-CPD（国際競争力強化研究員）
日本学術振興会では、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保を図るため特別研究員制度を実施しています。この特別研究員制度の一環として、優れた若手研究者が、海外の大学等研究機関で長期間研究に専念できるように支援する「特別研究員-CPD（国際競争力強化研究員）」事業を創設しました。
https://www.jsps.go.jp/j-pd/cpd_sin.html

お知らせ

●メールマガジンの配信
2019年4月からメールマガジンの配信を開始しました。当センターで実施するセミナーやシンポジウム、同窓会活動だけでなく、招へい事業や研究支援事業の募集等最新の情報をメールにて配信しています。配信を希望される方は、jsps-sto@jsps-sto.comまで御連絡ください。今後も随時配信してまいりますので、是非御講読ください。

お知らせ

その他

日本人研究者の会について

ストックホルム研究連絡センターでは、北欧諸国及びバルト三国で研究活動を行っている研究者を対象に、イベント情報の発信やネットワーキングのためのイベントを開催しています。まだ、当センターの研究者リストに登録いただいていない方は、こちら（https://www.jsps-sto.com/to-japanese-researchers/）から登録してください。ニュースレター、各種セミナー、イベントの情報を定期的にお知らせします。

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合は、以下ウェブサイトから登録してください。電子メールにて配信します。
https://www.jsps-sto.com/newsletter-2/

「EU一般データ保護規則（GDPR）」の適用を踏まえた個人情報の取扱いについて

2018年5月25日よりGDPRが施行されたことを踏まえ、ストックホルム研究連絡センターでは当規則に基づいて個人情報の取扱いに留意しています。北欧在住の日本人研究者を含む関係者の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。GDPRの施行を踏まえた個人情報の取扱いに関してお問い合わせがございましたら、当センターまでお知らせください。

表紙写真：アンデルセン公園内のチューリップ

デンマークのフュン島にあるオーデンセは、童話作家として世界的に有名なハンス・クリスチャン・アンデルセンの故郷である。聖クヌート教会の裏手にアンデルセン公園が広がっており、緑豊かな公園で、市民の憩いの場として親しまれている。かつてはアンデルセンの母親もここで洗濯をしたといわれている。春には様々な色のチューリップが花壇に咲く。（撮影 和泉一義）

次号の発行予定日：
次号は2019年8月下旬に発行予定。

JSPSストックホルム研究連絡センター　第62号

編集長：吉原　誉夫

編　集：和泉　一義

発行日：2019年5月24日（金）

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46（0）8 5248 4561

Website: https://www.jsps-sto.com

E-mail: jsps-sto@jsps-sto.com

Facebook：JSPS Stockholm Office